



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## 『源氏流極秘奥儀抄』注釈(七)47総角～54夢浮橋

著者	岩坪 健
雑誌名	人文學
号	209
ページ	1-34
発行年	2022-03-15
権利	同志社大学人文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/00029072">http://doi.org/10.14988/00029072</a>

# 『源氏流極秘奥儀抄』注釈（七） 47総角〜54夢浮橋

岩 坪 健

本稿は『源氏流極秘奥儀抄』の総角（『源氏物語』第四七帖）から夢浮橋（第五四帖）までを掲載する。各帖の担当者（釜丸祥、酒瀬川なおみ、日比野由佳、前田真記、真弓大芽）は、すべて本学博士課程在学者である。凡例などは前稿と同じであるので省略する。

## 四十七 総角

宇治の宮の事也<sup>1</sup> うばそくの宮、<sup>ミヤ</sup> 一回忌の御仏事、<sup>ヒトメグリ</sup> 姫君たちいとなみ給。<sup>タマフ</sup> 薰大将もこと加んとてわたり給ひて、<sup>カナルタイシヤウ</sup> 共に仏事を物し給ひける。<sup>オコトクハ</sup> 過にし御事は廿六にてかくれ給ふ。<sup>コトケハ</sup> 大将は限なく思ひて、<sup>カタマフ</sup> 比は冬なれば、いと、山里さひしく、<sup>コトケハ</sup> ふりつむ雪に跡つけ侘て、<sup>オモ</sup> かたしく袖の氷とけざりしをおもひ出給ひ、<sup>コトケハ</sup> 香机のすみに付たる四の鉢を名香の絵といふを見給て、<sup>カワフクエ</sup> 総角になかき契をむすひこめおなしところによりも逢なん<sup>アハ</sup>

## 総角

コテシイワク<sup>9</sup> 御伝曰、此形、<sup>コカタ</sup> 身木、<sup>ミキキ</sup> 尾花也。<sup>ヲハナ</sup> 松に時節の草花あしらひ也。<sup>マツ</sup> 尾花、<sup>ヲハナ</sup> 机の四の陽に付たる体也。<sup>ツクエヨツ</sup> 尾花、<sup>ヲハナ</sup> 四本活る筈な

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（七） 47総角〜54夢浮橋

れとも、四は嫌ふ故、三本活る也。頃<sup>13</sup>は秋と心得へし。

愚按<sup>14</sup>曰、ゆふかほを活る習<sup>イキク</sup>あり。聖徳太子の総角<sup>ソウカク</sup>をひさご花<sup>ハナ</sup>といへり。秘伝<sup>ヒテン</sup>也。尾花<sup>ヲハナ</sup>を雪<sup>ユキ</sup>とし、下<sup>シタ</sup>小松<sup>コマツ</sup>を活<sup>イ</sup>くよ

し、「いと、山里<sup>ヤマサト</sup>さひしく降<sup>フリ</sup>つむ雪<sup>ユキ</sup>にあとつけわひて」とあり。「宇治川<sup>ウジカハ</sup>」、「紅葉<sup>モミヂ</sup>」など云詞あり。馬蘭<sup>ウラン</sup>、紅葉<sup>モミヂ</sup>など習<sup>ナラヒ</sup>あり。

四十七 総角<sup>ソウカク</sup>（仏事<sup>ブツジ</sup>）<sup>20</sup> 小侍従。尾花。松。時節ノ花。小松。巴蘭。紅葉。

【訳】 宇治の八の宮の一回忌の法事を、宇治の姫君たちは執りおこないなさる。薫大将も仏事をさらに盛大に執りおこなおうと（宇治の八の宮邸に）お渡りになり、（姫君と）共に法要を行われる。過ぎ去ってしまったことは、（大君が）二十六歳でお亡くなりになる（ことである）。薫大将はこの上もなく悲しんで、季節は冬なので、ますます宇治の山里は寂しく、降り積もっている雪に足跡を付けかねて、独り寝の袖に涙が凍りついて溶けなかったことを思い出され、名香（仏前で焚く香）を供えた机の四隅に付いている四つの緒で、名香の糸というものをご覧になって（詠んだ歌）、

名香糸の総角結びに、あなたとの末永い契りを結び込めて、糸が同じところで結び合わされるように、あなたと結ばれたいものです。

御伝によると、この形式で中心とするのは尾花である。松に季節の草花をあしらう。尾花は机の四隅に（四つの緒を）付けた体裁である。尾花は四本活けるべきであるが、四は嫌う数字なので、三本活けるのである。季節は秋と了解するのがよい。

愚案によると、夕顔を活ける習わしがある。聖徳太子の総角（少年の髪型）を「ひさご花」といった。秘伝であ

る。尾花を雪と見なし、その下方に小松を活ける風情は、「ますます宇治の山里は寂しく、降り積もっている雪に足跡を付けかねて」とある（ことによる）。「宇治川」、「紅葉」などという寄合語がある。馬蘭、紅葉などを使う習わしがある。

【注】 1 「うはそくの宮の一めぐりの御仏事、姫君たち、いとなみ給ふ」（『小鏡』）。「うはそくの宮」とは、46椎本巻で八月二十日ごろに死去した宇治の八の宮を指す。 2 「かほるも事くはへむとて、わたり給ひて」（『小鏡』）。「姫君たちとかほる大将と友に、仏事をいとなみ給ひける」（『龍野』）。 3 「御年二十六にてかくれ給ふ」（『小鏡』）。前文までは八の宮の死去、この一文からは大君の死去について語られ、文脈がねじれている。46椎本巻に「姉君二十五、中の君二十三にぞなりたまひける」（二七六頁）とあり、その翌年に大君は没したので、享年二十六歳である。 4 「大将は限なく思ひて」（『小鏡』）。 5 「頃は冬なれば、いと、山里さひしく、ふりつむ雪にあとつけわひて」（『小鏡』）。 6 「かたしく袖の氷、とけさりしおもかけに」（『小鏡』）。薫が大君を偲び血涙を流しても喪服にはならない、と詠んだ箇所、「くれなるに落つる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり 聴色の氷とけぬかと思ゆるを、いとど濡らしそへつつながめたまふさま、いとなまめかしうきよげなり」（47総角の巻、三三一頁）を踏まえた表現であろう。「聴色の氷」とは、薫の薄紅の直衣が涙で濡れ、それが冬の寒さで凍っていることを表す。 7 「香づくへのすみに付たる四のを、名香の糸といふを見たまひて」（『龍野』）。『源氏流極秘奥儀抄』の本文「四の鉢を名香の絵」では解釈できず、『龍野』本文に従い「鉢」を「緒」、「絵」を「絲」の誤写と考えて訳す。「名香の糸」とは『湖月抄』の頭注によれば、「河名香ノ糸 行香ノ机ニ四ノ角ニ結垂絲也。」「さまざまの香を紙に包みて、五色の糸にて結びかけて、佛にたてまつる也。（下略）」とあり、『龍野』は『河海抄』の説を踏まえている。 8 巻名歌。『小

鏡』「龍野」も同文。「総角」とは紐の結び方の名で、輪を左右に出し、中を石だたみに組んで結び、房を垂らしたものの。『源氏流極秘奥儀抄』では大君の死後に詠んだように読めるが、『源氏物語』では八の宮の一周忌の準備をしている大君に薫が詠んで書いた歌である。 9 「此かた、身木、おはななり」〔龍野〕。「身木」は「幹」の当て字で、物事を中心となる部分、すなち幹部を意味する。 10 「松に時節の草花、応答べし」〔おはな無き時は、其心持を以て、松に時節の花をそへ、生るなり〕〔龍野〕。 36 柏木の巻の注20 「岩根の松といふ活方あり」でも、松で薫を表している。 11 「おはなは、つくへの角に付けたる四つの糸也」〔龍野〕。『源氏流極秘奥儀抄』本文には「陽」とあるが、「隅」の誤写と見なして訳す。 12 「おはな、四本生る筈なれとも、四つは嫌ふゆへ、三本生ける也」〔龍野〕。活け花で四本を避けるのは、古代中国では奇数を重んじることや、四が死に通じることがあると考えられる。北條明直氏は、「流派によって構成や役枝の名称に違いがあるが、一般に3本の主となる枝が中心となつて三角構成を形づくる。生花は天、地、人の三才をかたどる3本の役枝が三角形をつくり」と説明している（『日本大百科』「いけ花」項）。また、かつては「三枚ススキ、一枚遣いのススキなどと本数による使い方の決まりをさだめていた」（『いけばな総合大事典』「すすき」項）。 13 八の宮が亡くなったのは旧暦八月二十日頃なので秋である。 14 注15の文章に、「聖徳太子の総角をひさご花といへり」とあることに基づき、『源氏物語』の巻名である総角から十七、八歳の髪型である総角を導き、総角とともに年少時の髪型である「ひさご花」を記述した『日本書紀』により、ひさご花の別名である夕顔を連想することにより、夕顔の花が登場したのであろう。 15 『日本書紀』崇峻天皇に「是の時、厩戸皇子、束髮於額にして、古俗、年少児の、年十五六の間は、束髮於額にし、十七八の間は、分けて角子にす。今も亦然り。」（五二三頁）とある。これによれば、十七、八歳の髪型を総角（角子）、十五、六歳のそれを

「束髮於額」と呼称したと分かる。いけばな発祥の地とされる六角堂（紫雲山頂法寺）は聖徳太子によって創建され、また、古流生け花秘伝書の中には、いけばなの成立を聖徳太子と関連させているものがある（木下資一氏「古流生け花秘伝書」『目録』…聖徳太子信仰の一資料として）『日本文化論年報』一八号 二〇一五年三月。なお「秘伝」という言葉は、39夕霧の巻注12、50東屋の巻注19にも見える。16師説では名香の糸にたとえられた尾花の白い穂を、愚案では雪に見立て、小松は薫を表象する（注10参照）。薫が「降り積む雪に跡つけわびて」（注517の本文）の様子を表す。17注5参照。18「うち川」「もみち」など付へし。』（『小鏡』）。匂宮が紅葉狩りを口実に宇治へ足を延ばし、宇治川で舟遊びを行う場面（二九二頁）は、源氏絵にもよく取り上げられた。19葉蘭は宇治の川波を表わす。葉蘭を波にたとえるのは、7紅葉賀の巻注18、10賢木の巻注14、45橋姫の巻注17に見える。紅葉は匂宮の宇治の紅葉狩（注18）を示す。20「仏事」は八の宮の一周年や大君の死去による。21「小じちう」（（待遊））（『龍野』）。女三の宮の乳母子で、柏木を手引きした人物。ただし、『源氏物語』45橋姫の巻において「三条宮にはべりし小侍従はかなくはべりにける」（二四六頁）とあり、47総角の巻では死去している。『源氏流極秘奥儀抄』では、その巻に登場しない人物が記される例が散見される。

（釜丸祥）

#### 四十八 早蕨

宇治の宮の御姫中の君は、姉君にもおくれ給ひし春のころ、ひしりの方よりさわらびを送り来りけるを御覧して、この春はたれにかみせんなき人のかたみにつめるみねの早蕨とよめり。中の君は春のひかりを見給ふに、「春や昔の」と、たどられて、我身ひとりりを恨たまふ。「いそのかみふり

にし宮のうくひすに春となつけそ」となけき給ふ卷也。

早蕨

御伝<sup>2</sup>曰、此形早蕨、旨と活へし。蕨<sup>9</sup>穂に出たるもゆるす。又、ぜんまい、しだの葉、一色、軽活も、代用とす。山<sup>11</sup>がや、忍ぶ草も生る也。比は二月と心得へし。

愚按<sup>12</sup>曰、早蕨は初わらび也。穂の開たるを活れば、詮なかるべし。又、竹を高く活、飛雁を帰雁として、下早蕨を活るもよし。「峯の霞の立を見捨る」といふ詞、春の帰雁にもたせたり。又、柳、桜を活るもよし。都江<sup>17</sup>いづる意也。

18 見わたせは柳さくらをこき交て都そ春のにしき也ける

といふ歌によりて、柳、桜を活れば都のことと成也。また、桜と橘を活れば、禁中のことと成也。源氏巻中、心得とすへし。

四十八 早わらび 落葉のみや。早蕨、ぜんまい、齒朶、柳、桜。

【訳】宇治の八の宮の姫君である中の君は、姉君にさえも先立たれなされた春のころ、聖（阿闍梨）のもとから早蕨を送ってきたのをご覧になって、

（姉君までも亡くなつた）この春は誰に見せましようか。（聖が）亡き父の形見にと筐（籠）に摘んだ峰の早蕨を。

と詠んだ。中の君は春の日差しををご覧になるにつけても、「春や昔の」と思い迷って、（一人だけ生き永らえた）わが身自身をお恨みになる。「古びた宮邸のうくいすに春（が来た）」と告げてくれるな」とお嘆きになる巻である。

師伝によると、この形式は早蕨を主として活けるのがよい。蕨で穂に出たものも認める。また、ぜんまい、しだの葉、一種類の花を軽く活けるのも、(早蕨の)代用とする。山萱や忍ぶ草も活けるのである。時期は二月と心得なさい。

愚案によると、早蕨は初蕨である。穂が開いたものを活けては、どうしようもない。また、竹を高く活けて、飛雁(という形の葉)を帰雁(という鳥の様子)に見立てて、下に早蕨を活けるのもよい。「峯の霞が立つのを見捨てる」という一節を、春の帰雁になぞらえている。また、柳や桜を活けるのもよい。(これは宇治から)都に出ていく意味である。

はるかに眺めると青柳と桜を混ぜ合わせて、都はまさに春を織りこんだ錦であるなあ。

という和歌によって、柳や桜を活けると都のこととなるのである。また、桜と橘を活けると、内裏のこととなるのである。源氏物語の巻の中(で通用すると)、心得なさい。

【注】 1 「宇治の宮の御娘、中の君は」(『龍野』)。46椎本の巻で亡くなった宇治の八の宮の次女、中の君である。

2 「あね君にもおくれ給ひし春の頃」(『龍野』)。中の君の姉である大君は47総角の巻の冬に亡くなり、48早蕨の巻はその翌年の新春から始まる。 3 「<sup>聖</sup>ひじりの方より」(『龍野』)。「聖」は源氏物語では「阿闍梨」とも呼ばれ、いずれも高僧を意味する。 4 「さわらひを送り来りけるを御覧して」(『龍野』)。物語では「蕨、つくづくし、をかしき籠に入れて」(三四六頁)、『小鏡』でも「はるのはしめに、わらひ、つくくし、おかしけなるかこに入てたてまつるとて」とあり、蕨のほか土筆も贈られていた。 5 卷名歌。『小鏡』も同文。『此春はたれにか見せん』との御歌こそ、御いたわしきもの語<sup>(物語)</sup>にておはしまし候」(『龍野』)。蕨を贈ってくれた聖に、中の君が返した歌。父宮も姉君も



亡くなり、蕨を見せる相手がいない悲しみを詠む。 6 「中の君は春のひかりをみ給ふに」（『小鏡』）。物語には「藪しわかねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日ならむと」（三四五頁）とある。新春の日差しは悲しみに沈む中の君にも降りそそぎ、光と心の闇の明暗を浮かび上がらせる。 7 「春やむかしの」とたとられて、わか身ひとりりを恨み給ふ」（『小鏡』）。『月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして』（古今和歌集・恋五・七四七・業平。伊勢物語・四段）による。物語では、「まして、『春や昔の』と心をまどはしたまふどちの御物語」（三五六頁）とあり、「春や昔の」と大君の逝去を嘆き悲しむのは中の君だけではなく薫も加わる。

8 「いそのかみふりにし宮のうくひすに春となつけそと、なけき給ふ」（『小鏡』）。和歌の一部かと思われるが出典不明。和歌の世界では鶯は春告げ鳥。 9 蕨は早春、先端が拳状に巻いた新葉を出し、この状態が早蕨で食用にする。そののち拳状の葉が開き始めて穂が出て、最終的に葉を広げきつてウラジロのような形状になる。 10 「此かた、わらびの穂か、せんまいの穂か、したのほか」（『龍野』）。ゼンマイもシダの葉も、物語と『小鏡』には登場しない。いけばなの世界ではワラビもゼンマイも、あまり使われてこなかった。ワラビは『いけばな花材総事典』によると、「ぜんまいのようにしっかりと軸と渦巻き状の形のよさがないためか花材には用いられない。（中略）江戸時代中期以後新しく工夫された生花に取り入れられている。」とある。ゼンマイも『いけばな総合大事典』には、「まれにへゴゼンマイやゼンマイがその巻き耳の形がおもしろいのでつかわれることもある。」とある。『現代いけばな花材事典』では、「いけばなでゼンマイというときは、植物学上のゼンマイではなく、ぜんまいのように巻いたシダの若芽を指しており、正月のしめ飾りに使われるウラジロの若芽がよく利用されている。」とある。ゼンマイとシダの葉をワラビの代用にするのは、似た植物と見られていたのであろう。 11 「一色を軽く生る」（『龍野』）。「一色」とは華道で、

一 種類の草木を活けること。 12 「山かやにしのふ草、おもに生るなり」(『龍野』)。山萱は15蓬生の巻注9、26常夏の巻注8、38鈴虫の巻注10参照。『源氏流極秘奥儀抄』の山萱は山に自生する萱で、宇治の宮邸を示すか。忍ぶ草には軒忍のきりひと萱草かんぞうの二種類があり、前者は4夕顔の巻(二五九頁)や15蓬生の巻(三五二頁)に用いられ荒廢した邸を表わす。後者については9葵の巻注19参照。萱草で染められた衣装は喪服に用いられ、幻の巻(五三八頁)では亡き紫の上を偲ぶ中将の君が着用している。 13 中の君が早蕨の歌(注5)を詠んだのは一月であるが、匂宮が中の君を京の自邸に引き取ったのは「二月の朔日ごろ」(三五二頁)である。「さて、此巻の二月に、にはふ兵部卿の宮へむかへられ給ひて、いとめてたし」(『小鏡』)。 14 注9参照。 15 飛雁は21少女の巻注17、26常夏の巻注17参照。帰雁は春になって北へ帰る雁で、春の季語。 16 「峯の霞の立を見捨る」(『小鏡』寄合語)。物語には「峰の霞のたつを見棄てむことも」(三五二頁)とあり、この表現は「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる」(古今和歌集・春上・三一・伊勢)による。 17 注13参照。 18 「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」(古今和歌集・春上・五六・素性)。 35 若菜下の巻注23参照。 19 宮中の紫宸殿では南階下の東側に桜、西側に橘を植え、「左近の桜、右近の橘」と呼ぶ。 20 落葉の宮は朱雀院と一条御息所の娘で、柏木の北の方である。柏木の死後、夕霧に好意を寄せられ、夕霧の娘である六の君を養女にする。この六の君は49宿木の巻で、中の君を迎えた匂宮と結婚する。よって落葉の宮は中の君と全く関係がないわけではないが、早蕨の巻に落葉の宮は登場しない。

(酒瀬川なおみ)

四十九 寄木ヤトリキ

此巻をやとり木キといふは薫カホヒの宇治ウヂのふるき宮ミヤにてよみ給ひし、

2 やとり木とおもひ出ずは木のもとコのたびねもいかにさびしからまし

といふ歌の故也。此心は、宇治の大君失給ひてのち、年月ふれども大將なげき忘れ給はず、中の君はにほふ宮の北の方カタなりておはしませは、宇治の宮いとあれはてんとおほしめして、弁の君の尼と成しをやとりし給ふ哀なる巻也。

寄木

御伝コテ曰、此形は陰花の物を陽の座直して生る。則宿木也。「旅寝もいかにさびしからまし」といふ歌の心也。是は常ツネに活る外ホカの形にも有事也。たとへは、竹、水仙の類は陰物也。陰の物は床の右手、定座也。左の陽座に置に依て、やとり座也。夫故あしらひものをは陽花ヤウカにして、身木と花入との間はさみて前マヘに出しあしらふへし。幹は右座に成也。然るにあしらひを同じ陰物キナシモノすれば、いかやうにあしらふても、やはり寄木也。能々心得へし。

愚按クアン曰、寄木とは木の股、或は凹に他木生するを云也。然れば二重切に木と木、一色つ、活れば、則是も寄木の本ホンと成也。されば、御伝の置所の左右の論の外ホカに花形、宿木をなす也。たとへ中央にても其意、足るへし。又、白花をも活てよし。「有明の月もやうくすみのぼりて」と詞コトよれり。又、松をも活る。歌よれり。又、しのせを活る。是も歌よれり。又、菊をも活る。是も歌よれり。又、春なれば藤をもいける也。次のとし藤の盛に藤つぼにて藤の宴し給ひて、其夜笛を吹給へることあり。是によれる因也。

四十九 寄木(吊) 下わうのかうゐ。 宿木、竹、水仙、白花、菊、藤。

【訳】この巻をやとり木というのは、薫が宇治の古い宮邸(八の宮邸)でお詠みになった、

昔宿ったことがあると思ひ出さなければ、この深山木ミヤマキの下の旅寝もどんなに寂しいものになったことだろう。

という歌に由来する。この趣は、宇治の大君がお亡くなりになった後、長い年月が経過しても薫大將は嘆きお忘れに

ならず、中の君は匂宮の北の方になっていらつしやるので、宇治の宮邸は非常に荒れ果てるだろうとお思ひになつて、弁の君が尼になつたのを宿守になされる、趣深い巻である。

師伝によると、この形式は陰花の物を陽の座に直して活ける。すなわち（仮の座に置くので）宿木である。「旅寝もどんなに寂しいものになつたことだろう」という和歌の趣である。これは常に活けるほかの形式にもあることである。例えば、竹、水仙のようなものは陰物である。陰の物は、床の間の右手が定位置である。左の陽座に置くので、（仮の）宿りの位置である。そのために添え物を陽花にして、中心にする花と花器の間に挟んで前に出して添えるのがよい。中心とする花は右座になるのである。ところが添え物を同じ陰物にすれば、どのように添えても、やはり宿木である。十二分に心得なさい。

愚案によると、宿木とは木の股、あるいはくぼみに他の木が寄生している物をいうのである。そのため、二重切に木と木を一種類ずつ活ければ、これも宿木の本体となるのである。それゆえ、師伝のいう、置き所の左右の論のほかに、挿花形式も宿木となるのである。たとえ（置き所が）中央であつてもその意味を満たさだろう。また、白花を活けてもよい。「有明の月もだんだん澄み上つて」という言葉による。また、松も活ける。（それは）歌による。また、篠<sup>しのすき</sup>薄も活ける。これも歌による。また、菊も活ける。これも歌による。また、春になれば、藤も活けるのである。次の年の藤が花盛りの頃に、藤壺で藤花の宴を開催なされて、その夜に笛をお吹きになつた事がある。これに因んだことである。

【注】 1 「此巻やとり木と云事、かほるの、<sup>（字世）</sup>うちのふるき宮にてよみ給ひし」（『小鏡』）。 2 卷名歌。『小鏡』も『龍野』も同文。初句の「宿り木」は他の植物に寄生する植物の総称で、ここでは邸中の老木に絡まりつく蔦を指し、か

つて泊まったという意味の「宿りき」を掛ける。 3 「此心は、うちの大君、失給ひて後、とし月ふれとも、かほる大将、なげき忘れ給はず」(『小鏡』)。「かほる大将、うちの姫君におくれ給ひてのち、(中略)なげきおほしめして」(『龍野』)。大君は47総角の巻で死去。 4 「中の君は、にほふ宮の北のかたになりて」(『小鏡』)。 5 「宇治の宮、いとあれはて、などおほして」(『小鏡』)。「宇治のやとり、あれはてん事まで」(『龍野』)。宇治の宮に住んでいた八の宮と大君は亡くなり、中の君は京都の匂宮邸に引き取られたので、主がいなくなった家は荒れ、親しい人々を失った薫にはいっそう荒廃したように感じられた。 6 「かのむかしの事、かたり聞せし弁の君も、姫君にわかれ奉りて、あまになりてしを、爰の宿もりになし給ふに」(『小鏡』)。「寺となし、弁の君の尼となりしを、やとりにしたまふ事を、やとり木の巻と申にて候。」(『龍野』)。大君の死後まもなく尼になった弁の君を(48早蕨の巻三五八頁)、薫は寺に改築する宇治の宮邸の「宿守り」(留守居役)にした。 7 「此かたは、陰花の物を陽座へ直して生るにて、宿り木也」(『龍野』)。「陰花」は11花散里の巻注11、「陰陽」は33藤裏葉の巻注7参照。『いけばな総合大事典』の「陰勝手」項によると、「いけばなでは陽の空間すなわち「陽方」が向かって左側、陰の空間すなわち「陰方」が右側にあり」とする一方、「陰陽」の解釈は以下のように多様であると述べる。(1)太陽光線の当たる陽表が陽、当たらない陽裏が陰。(2)陽が奇数、陰が偶数。(3)大きいものが陽、小さいものが陰。(4)葉が広く見える方が陽、狭く見える方が陰。(5)床の間の光線の差す方向が向かって右の場合、右空間を陽、左空間を陰と呼び、その反対に左から差し込む場合は名称も逆。 8 「たひねもいかに」(『龍野』)。注2の和歌の下の句。通常は陰座に置く陰花を陽座に据えると「旅寝」になる。 9 「是は、常に生る外の形にも有之事也」(『龍野』)。 10 「たとへば、竹の水仙入と云は、陰の物なり。」(『龍野』)。「いけばな総合大事典」の「陰木」項によると、「梢から花の咲き出すもの」(梅、桃、桜、牡

丹、常夏、菊、女郎花おみなえし、藤袴ふじかばなどを「陽木」「陽草」、「花がうつむいているものや、あおぐように咲くもの」(竹、山吹、藤、花菖蒲、燕子花かきつばた、朝顔、蓮、桔梗ききょう、葉蘭、万年青おもとなど)を「陰木」「陰草」と呼ぶ。11「陰の物は、床の右手、定座也」(『龍野』)。「いけばな総合大事典」によると、花は人間に向いている方を前とするので、人から見て左は花の右になる。「陰の物」は、注7・10参照。12「其定座、左の陽座へやりて置に依て、やとり座也」(『龍野』)。当巻で薫が宇治の邸に宿ったことを表わす。13「それゆへ、応答物をは陽花にして、身木と花入レとの間にはさみて、前へ出して応答て、身木は右座になる心になる也」(『龍野』)。「あしらい」とは主となる物に添えて、その働きを助ける物のうち、道具や役枝以外の枝を指す(『いけばな総合大辞典』)。31真木柱の巻注7参照。14「然るを、応答も同じ陰物なれば、いかように応答ても、やはり、やとり木也」(『龍野』)。15「能々、考へき也」(『龍野』)。16「宿木」は注2参照。17「二重切」は17絵合の巻注7参照。18「いけばな総合大事典」の「花型」はながた項によると「花形」とは、「插花形式」の省略語で、いけばなでの「作品形式」の意である。19「有明の月もやうくすみのぼりつ、」(『小鏡』)。「白妙の白き月をも紅の色をもなどかあかしと言ふらん」(拾遺和歌集・雑下・五一八・藤原伊衡)のように月の色は白とされていたので、白い花に例えた。6末摘花の巻注14、18松風の巻注17、38鈴虫の巻注15でも「白花」を月になぞらえる。20「山さとの松のかけにもかくはかり身にしむ秋の風はなかりき」(『小鏡』)。中の君の詠歌(当巻四〇四頁)。21「ほに出ぬ物おもふらししのす、さまねくたもとの露しけくして」(『秋はつる野へのけしきものす、きほのめく風につけてこそしれ』(『小鏡』)。句宮と中の君の贈答歌(当巻四六五・四六六頁)。「篠薄」シノスギは篠と薄、または群生している篠や薄。和歌では、思いが表面に現われる意の「穂」をひき出す序詞の一部として使われることもある。22「霜にあへすかれにしその、きくなれどのこりの色はあせすもあ

るかな」（『小鏡』）。帝の詠作（当卷三七九頁）。 23 「次のとしの藤のさかりに藤つほにて、藤の宴し給ひて、やか

てその夜、大将の御もとへ宮うつろはせ給ふなり。その夜の笛にて、かのゑもんのかみのつたへし笛を大将ふけるな

り」（『小鏡』）。三月末に帝主催の藤花の宴が開かれ、衛門の督（柏木。薫の実父）遺愛の横笛が用意されて薫が吹い

た。宴の終了後、薫は女二の宮を自邸に迎えて結婚した（当卷四八〇頁）。 24 「吊」は41幻の巻注12参照。 25

「宿木 下らうのかうゐ」（下藨）（更衣）。「下藨」は官位の低い者を指し、「下藨の更衣」は1桐壺の巻の冒頭に見られる。

（日比野由佳）

五十 四阿

宮の北の方、薫るに語り出し給ひたりしひめ君を母、左近の少将と云人をすでにむこがねにとらんとせしぞかし。そ

れを常陸守き、つけて、つらき心ありて、浮舟の君を中の君へあつけられし事あり。さて此巻を東屋と云事は、かを

るの歌に、

7 さしとむる律やしけき四阿のあまり程ふるあまそ、ぎ哉

8 といへるより卷の名とは、なしたる也。

四阿

御伝二曰、此形は律を幹とす。枯たるを添へ活る。糸芒、時節の花をあしらふべし。ころは九月と心得べし。是は

母、左近の少将と云人をむこにとらんせしことあり。されは賀取の祝義に用るもあしからず。

愚按二曰、「宇治江おはして」とあれは、茶の花活てよし。すべて桜に芳野山をおもひ、紅葉に高雄をしのぶ。風雅

のことなれば、茶の花を活て宇治をしらす事、秘伝とす。又、車に縁あれは其名の草みはからふべし

第六東屋 極真<sup>22</sup> 禁裏之御涼所ヲサシテ東屋トイウ

東屋のまやのあまりの雨そ、きそ<sup>25</sup>、きそけなく匂ふ橋<sup>26</sup> 是は右近の橋を詠し歌なり。

【訳】 匂宮の正妻（宇治の中の君）が薫に語り出された姫君（浮舟）に、（浮舟の）母は左近の少将という人をすでに婿に迎えようとしていたのである。そのことを常陸守（浮舟の継父）が聞きつけて、（浮舟の母にとって）無情な思惑が（常陸守に）あつて、（浮舟の母は）浮舟を中の君に預けたことがある。さて、この巻を東屋<sup>ゆずまや</sup>というのは薫の歌に、

戸口を閉ざしてしまふほど、葎が生い茂っているのだろうか。東屋の軒端に降りそそぐ雨の中で、あまりにも長い間待たせられることよ。

と詠んだので、巻の名前となったのである。

御伝によると、この形式は葎を中心とする。枯れたものを添えて活ける。糸薄や季節の花をあしらうのがよい。季節は九月と心得なさい。これは（浮舟の）母が、左近の少将という人を（浮舟の）婿に迎えようとしたことがある。それで婿取りのお祝いに用いるのも悪くない。

愚案によると、「宇治にいらっしやつて」とあるので、茶の花を活けるのがよい。すべて桜に吉野山を思い、紅葉に高雄山を偲ぶ。風雅のことなので、茶の花を活けて宇治を連想させることを秘伝とする。また、車に縁があるので、車の名前が付いた草を見繕うのがよい。

第六東屋 極真。帝の住居である御涼所を指して東屋という。

東屋の屋根の軒先の雨だれが降り注ぐのとは関わりなく、美しく咲く橋よ。これは右近の橋を詠んだ歌である。



【注】 1 「みやのきたのかた、かほるに語り出し給ひたりしひめきみを」（『小鏡』）。49宿木の巻で、宇治の中の君は異兄妹の浮舟を薫に紹介する。 2 「母、さ（左近）こんの少将（せうしやう）と云人を、すてにむこにとらんとせしそかし」（『小鏡』）。浮舟の母は浮舟に寄せる薫の想いを知っていたが、あまりの身分違いに悩み、左近の少将を浮舟の「婿がね」（婿の候補者）に選んだ。 3 「それをひたちのかみ聞つけて」（『小鏡』）。常陸守の財産が目当てだった左近の少将は、浮舟が常陸守の継娘と知るや縁談を破棄して、常陸守の実子と結婚することにした。そこで常陸守も、浮舟のために用意した婚礼調度を実の娘に渡して準備を進めた。 4 「浮ふねの父、ひたちの守といへる人の、つらき心有之」（『六帖』）。「いと口（くち）おしくおほして」（『小鏡』）。「つらき心」とは、継子（浮舟）から実子に乗り換えた常陸守の「心」が、浮舟の母（常陸守の妻）には「つらき」なのである。 5 「浮舟の君を中の君へあつけし事」（『六帖』）。「宮の北のかたの御もとへつけてゆきて、あつけ聞ゆ（き）」（『小鏡』）。 6 「此巻をあつまやと云事、かほるの歌に」（『小鏡』）。 7 巻名歌。『小鏡』も『六帖』も同文。浮舟の隠れ家を尋ねた薫を部屋に入れるか、浮舟の乳母たちが話しているうちに時間が経ち、簀子で待たされた薫は、律で戸が閉じふさがれたから出て来られないのだろうか、と詠んだ歌。第三・四句「四阿（アツア）のあまり程ふる」の「あまり」は、名詞の「あまり」（軒端の意味）に副詞の「あまり」（むやみに）を掛ける。催馬楽「東屋」の「東屋の 真屋のあまりの その雨そそぎ 我立ち濡れぬ 殿戸開かせ／（かすがひ）銚（と）もあらばこそ その殿戸 我鎖（と）さめ おし開いて来ませ 我や人妻」による。 8 「といふうたのゆへなり」（『小鏡』）。 9 「此かた、むくらを身木とす。枯にそへ生る」（『六帖』）。巻名歌の第二句にある「律」は雑草の一種で、枯れたものを添えるのは旧暦九月だから（注11）、あるいは東屋の葺きおろした形の屋根を表すか。 10 「糸す、き、時節の花を応答なり」（『六帖』）。『いけばな総合大辞典』によると、イトススキはススキの中でも全体に小型で葉の

細いものを指す。 11 「頃は九月なり」(『小鏡』)。薫が浮舟の隠れ家を訪れ(注7参照)、その翌朝、宇治へ連れ立ったのは「九月」(九三頁)である。 12 注2を参照。 13 「いけばな総合大辞典」『婿嫁取りの花』項には、「婿取り、嫁取りの祝言にかざる花」とある。常陸守が実子の婿に左近の少将を迎えたことにちなむ。 14 「さて大将殿、宇治におはして」(『小鏡』)。薫は宇治の八の宮邸に住まわせている弁の尼(49宿木の巻注6参照)を訪れ、浮舟の隠れ家に行かせてから、自分も尋ねた(注7参照)。 15 宇治は室町時代以降、良茶の名産地になる。 16 『古今和歌集』仮名序に、「春の朝、吉野の山の桜は、人麿が心には、雲かとのみなむ覚えける」とあり、吉野は桜の名所であった。 17 『古今和歌集』仮名序には「秋の夕べ、龍田川に流るる紅葉をば帝の御目には錦と見たまひ」とあり、和歌の世界では龍田が有名であったが、江戸時代になると高雄が洛西きつての紅葉の名所になる。 18 「風雅」とは詩歌・文章の道のことで、ここでは注16から知られるように歌道を指すか。 19 桜は吉野、紅葉は高雄と結びつくように、茶の花を活けて宇治を連想させる。 20 「わか御車わかみぐるまにのせて」(『小鏡』)。薫が浮舟を連れて隠れ家を出る際(注11参照)、車に相乗りしたことによる。 21 小車わかみぐるまは七月十月にかけて直径三センチほどの黄色の花が咲き、その形状は車輪に似る。開花時期は旧暦九月(注11)に合う。 1 桐壺の巻注11、4夕顔の巻注10、14瀟標の巻注18参照。 22 全五十四帖のうち六帖が秘伝とされ、その中でも当巻が「極真ごくしん」(極秘)である。 23 「御涼所おすずみじよ」は京都御所にある納涼の御殿。 24 当歌上の句は、催馬楽「東屋」の出だしと同じ(注7参照)。 25 「そげなし」はすげない、つれない、無愛想だ、という意味。 26 「右近の橘」は48早蕨の注19参照。橘は「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(『古今和歌集』卷三・夏歌・一三九)のように懐旧の風物として有名であり、物語にも「花の香も客人まろうとの御匂ひも、橘ならねど昔思ひ出でらるるつまなり」(48早蕨の巻、三五七頁)とあり、橘の香りは亡き大君への思慕

と結びつく。浮舟を迎え入れながらも、大君を忘れられない薫の心情を表すか。

（前田真記）

五十一 浮船

匂ふ宮、浮舟にちぎり給ひて、かをる大将に姿をやつし、夜に入て浮舟のもとへかよひ給ふことあり。又、ちいさき舟にのりて、さしわたすに、はるかなるきしに漕はなれたらん心ちして、いと心ほそく、有明の月のすみのぼりて、氷のおもて、くもりなきに、「是なん橋の小島」と申て、小舟をさしとゞめたるを見給へは、大なる岩のさましたる、されたる常盤木有。

橋の小島の色はかはらじをこのうきふねのゆくへしられぬ

浮舟

御伝曰、此形、大葉もの船にみるへし。牡丹か桜か梅か椿か杜若、百合よろし。又、時節の珍花にても大りん物よろし。

愚按ニ曰、「晝かへらんとおぼしつれども、さらに立はなれかたく」と云詞によりて、朝顔よし。又、「御馬にて帰り給ふ」といふによりて、馬の名のある草活る事、習あり。

宮の歌

よにしらすまとふへきかなさきにたつなみたまみちをかきくらしつ、

浮舟かへし

なみたをもほとなき袖にせきかねていかにわかれをと、むへき身そ

五十一 浮舟<sup>21</sup> 句兵部卿。大葉もの、牡丹、桜、梅、椿、百合。

【訳】句宮は浮舟に約束なさって、薫大将に姿を変えて、夜になって浮舟のもとへお通いになることがある。また、小さい舟に乗って、対岸へ渡すと、遠く隔たっている岸に（向かって）漕いで離れていくような気持ちが出て、（浮舟は）とても心細く、有明の月が輝き高く昇り、氷の表面が澄んでいる中、（舟人が）「これが橘の小島」と申して、棹をさして小舟を止めたので御覧になると、大きな岩の形をしていて、風雅な常緑樹がある。

橘の小島の（葉の）色のように約束は変わらなくても、この（水に）浮く小さな舟のようなつらい私の行く末はわかりません。

師伝によると、この形式は大葉ものを船に見立てるのがよい。牡丹か桜か梅か椿か杜若、（または）百合がよろしい。また、季節の珍しい花でも大輪の物がよろしい。

愚案によると、「（句宮は）夜明け前に帰ろうとお思になったけれども、（浮舟から）ますます離れがたくて」という一節によって、朝顔がよい。また、「（句宮は）御馬でお帰りになる」という（一節）によって、馬の名前のある草を活ける事にしきたりがある。

句宮の和歌、

またとなく心が迷い、道にも迷うことだなあ。（別れに）先立つ涙も帰り道を見えなくして。

浮舟の返歌、

涙をも（私の）狭い袖ではせき止められないのに、（私は）どうして別れを引き留められる身分でしょうか。

【注】 1 「にはふ兵部の宮、浮ふねに契り給ふとて」（『龍野』）。異腹の姉にあたる中の君に預けられていた浮舟を、

中の君の夫である匂宮が見つけて言い寄り、別れる際、「いみじう恨み契りおきて出でたまひぬ」（50東屋の巻、六六頁）と再会の約束をした。 2 「かほる大将に姿をやつし」（『龍野』）。『龍野』の文章では、匂宮は薫が宇治に隠した浮舟にこっそり会うため、薫に変装したことになる。しかし物語には、「（匂宮は）あやしきさまのやつれ姿して、御馬にておはする」（当巻、一一八頁）とあり、目立たないように姿などを変えただけである。ただし浮舟の女房たちには正体をばれないように声は薫に似せて、「のたまふ声、いとようまねび似せたまひて忍びたれば」（二二四頁）とあるほか、灯りを消させて、「もとよりほのかに似せたる御声を、ただかの御けはひにまねびて入りたまふ」（同頁）とある。 3 「夜に入て、浮ふねのもとへ行給ふ事」（『龍野』）。 4 「ちいさき舟ふねにのり給ひて、さしわたすに」（『小鏡』）。匂宮は再び浮舟を訪れ、宇治川の対岸にある家まで舟で浮舟を連れ出す（一四八頁）。 5 「はるかなるきしに、こきはなれたらん心ちして」（『小鏡』）。「遙かなる岸」は彼岸、すなわち極楽浄土を連想させ、浮舟は来世に連れ去られるような錯覚に陥り「いと心ほそく」感じた。 6 「いと心ほそく」（『小鏡』）。 7 「有明ありあけの月のすみのほりて」（『小鏡』）。「有明の月」は陰曆十六夜以後の月。夜更けに舟に乗った。 8 「水みづのおもてくもりなきに」（『小鏡』）。物語には「水の面も曇りなきに」（一五〇頁）とある。当場面には、「日さし出でて軒の垂水の光あひたるに」（一五二頁）とあるほか、匂宮の歌にも「峰の雪みぎはの氷踏みわけて君にぞまどふ道はまどはず」（一五四頁）とあるので、「水」を「氷」と見間違えたか。 9 「これなんたちはなの小嶋と申て」（『小鏡』）。橋の小島は宇治橋の南方にあった。 10 「御舟ふねさしと、めたるを見給へは」（『小鏡』）。 11 「大やかなる岩いはのさまして、されたるときは木のかげ、しけれり」（『小鏡』）。この常盤木は橋を指す。 12 卷名歌。『小鏡』も『龍野』も第四句は「このうき舟ぞ」で、「うき」に「浮き」と「憂き」を掛ける。当歌は、常緑の橋の葉にかけて不変の愛を約束する歌を詠んだ

句宮に対する浮舟の返歌（一五二頁）。13 「此形、大葉もの、船と見るべし」（『龍野』）。「大葉」は「大きな葉のこと」で、「枇杷の葉が一般的だが、柏、朴ほおなどの葉もちいられ」（『いけばな総合大事典』「大葉おおは」項）、ここでは句宮と浮舟が乗る舟を表す。「大葉」は19薄雲の巻注11、21少女の巻注8、24胡蝶の巻注8、27篝火の巻注8参照。

14 「牡丹、桜か梅か椿か杜若か、すかしゆりなどの大りん（大輪物）ものよし」（『龍野』）。「大輪」は普通より大きい花で、『龍野』では「うつくしき大輪は浮舟の君の心也」と浮舟に見立て、「牡丹」以下の花々が選ばれているが、「桜」「梅」以外は当巻の物語本文に見られない。「牡丹」は『いけばな総合大事典』によると、「百花の王」と中国でいわれ、富貴の象徴のようにあつかわれていた。（中略）見所としてポタンの美しさをひきたたせるために、これに取り合わせる他の材料は色彩の美しいものを禁じている。生け花では一般に一種としてあつかわれ、ポタンの花の富貴の意味とその品格とを尊重されていけられて」いるとある。また「桜」も同事典では、「立華における一色物のサクラは花の王者としてあつかい（中略）生花においてもおなじような扱いをしているが、サクラをいけた生花は他のものにくらべて格のあるものとして上座に置かれるなど、花物の花材としては別格のものとして扱われていた」とあり、「牡丹」に劣らず格が高い。物語の当巻には、「紫の薄模様にて桜つけたる文を」（一七三頁）とある。「梅」は当巻では、「をりにあひたる物の調べどもに、宮の御声はいとめでたくて、梅が枝などうたひたまふ」（一四六頁）や「濃き衣に紅梅の織物」（二五五頁）のように使われている。「椿」は6末摘花の巻注13と8花宴の巻注8と45橋姫の巻注14では月、17絵合の巻注15では弘徽殿女御に、「杜若」は12須磨巻注15と17絵合巻注18では紫の上、33藤裏葉巻注15では夕霧に、「百合」は25蛭の巻注7では蛭にそれぞれ例えている。また「時節シセツの珍花ゼンカ」は4夕顔の巻注9では光源氏、15蓬生の巻注8では末摘花、22玉鬢の巻注6では玉鬢になぞらえる。15 「晧あかつきかへらむとおほしつれとも、さらにたち

はなれかたく(『小鏡』)。「朝顔」は寝起きの顔を意味し、ここでは浮舟の顔を表す。それを見た匂宮は、ますます浮舟から離れがたかった。 16 「御馬ごまにて、かへり給ふ」(『小鏡』)。馬の名が付いたものとして、馬蘭ばらんや馬酔木あせびが挙げられる。馬蘭は7紅葉賀の巻注18参照。馬酔木は万葉集に詠まれ、早春に白いつば形の花が多数咲き、『いけばな花材総事典』には「室町時代から用いられた」とある。 17 「宮の御歌」(『小鏡』)。 18 「小鏡」と同文。 19 「うき舟、御返事」(『小鏡』)。 20 「小鏡」と同文。「ほどなき」に狭いと、身分がとるに足りないの二つの意味を重ねる。 21 「浮船うきふね かふる兵部卿」(『龍野』)。「龍野」は兵部卿の宮(匂宮)と薫の君を、同じ人と勘違いしたか。42 匂宮の巻、注12参照。

(真弓大芽)

五十二 蜻蛉かたろふ

浮舟うきふねの君きみ、ものおもひしけく、心こころそ、ろに成なり、いつくともなく失玉うせたまひけるを、匂宮ニホミヤナケ歎なげきのあまり、篋かみとをほしめしめて、浮舟うきふねのめしつかひ侍従しんじゆといひし女おんなを使給つかへひしことを書かきたる巻まきなり。かけろふといふは、君きみの行ゆくへなければ、「手にとられず」といへるより、此巻このまきの名なとはなしたる也なりけり。

有あとみててにはとられずみれば又また行衛ゆくへもしらす消きしかけろふ

蜻蛉かたろふ

御伝おのでん曰いわく、此形このかたち、末枯すえかれのものを思おもふ身みこがす也。時節ときせつの珍花ちんか、下した活いべし。さて、浮舟うきふねの君きみいづくともなく失給うせたまひしを、匂宮ニホミヤナケ歎なげき給たまふ也。さて蜻蛉かたろふとは名付なづけたれば、大和やまとなでしこを活いる事こと習ならひあり。日本紀ニホノキに大和やまとの国形くにがたを、神武天皇じんむてんおうみそなはして、「蜻蛉かたろふのとなめせるか如ごとし」との給たまへり。蜻蛉かたろふは則すなはちかけろふ也。其羽そのはニ似にたりとの事、大和撫子やまとなでこ、其縁そのえん

と心得へし。

愚按<sup>15</sup>曰、陽炎、

是は、春、陽氣の立ちのぼるをいふ。

野馬<sup>16</sup>をかけるふと訓は、

莊子の理諺抄<sup>イテ</sup>出たり。蜻蛉<sup>17</sup>は秋のむ

し也。本名<sup>18</sup>はアキツムシト云故に、日本<sup>ニホシ</sup>をアキツシマといふ也。さて、散<sup>チリ</sup>やすき花<sup>ハナ</sup>、はかなき草花<sup>サウクハ</sup>を活るは、「か

けるふのあるかなきか」にたとふる也。

五十二 蜻蛉<sup>20</sup>（吊） 蔵人<sup>21</sup>の少将。末枯ノモノ。時節ノ珍花。大和撫子。

【訳】浮舟の君は悩みが絶えることなく、心が落ち着かなくなり、行方不明になられたので、匂宮は嘆きのあまり、（浮舟の）形見とお思いになって、浮舟の女房である侍従といった女性を召し抱えられたことを書いた巻である。かげろうというのは、浮舟の君の行方がわからなくなり、（薫が）「手に取られず」と詠んだことにより、この巻の名とは成したのであった。

いと見ても手には取られず、見るとまた行方も知らずに消えた蜻蛉（のように、宇治の大君と中の君は捉えがたく、浮舟とは契りを結んだのに行方知れずになったの）だなあ。

御伝によると、この形式は末が枯れ（て焦げたように見え）たものを、悩み身を焦がす（ことになぞらえる）のである。季節の珍しい花々を下に活けるのがよい。さて、浮舟の君がどこへともなくいなくなられたことを、匂宮はお嘆きになるのである。さて、（巻の名前を）蜻蛉と名付けたので、大和撫子を活ける習わしがある。『日本書紀』に大和盆地の（丸い）形を神武天皇がご覧になって、「蜻蛉<sup>アキツス</sup>が交尾しているよう（に円形）である」とおっしゃった。蜻蛉<sup>アキツス</sup>はトンボのことである。（日本列島の形は）その羽に似ているということ、大和撫子はその縁であると心得なさい。愚案によると、陽炎<sup>かげろう</sup>、これは春に陽氣が立ちのぼることをいう。「野馬」を「かけるふ」と訓じるのは、莊子の



『俚諺鈔』に出ている。蜻蛉（かげろう）（トンボ）は秋の虫である。実名はアキツムシというので、日本を秋津洲（あきつしま）というのである。さて、散りやすい花、はかない草花を活けるのは、「かげろふのあるかなきか」になぞらえるのである。

【注】1 「浮船の君、ものおもひしけく、心そゞろに成」（『龍野』）。浮舟は薫と匂宮に愛され板挟みになり、さらに母から、匂宮と関係を持たれば勘当すると言われ、激しく苦悶する。2 「いづくともなくうせ給ひけるを」（『龍野』）。耐えきれなくなった浮舟は宇治川に入水する決意を固めて失踪する。ここまでは51浮舟の巻の内容である。

3 「匂宮、なげきのあまり」（『龍野』）。「宮は、ひたすら此なげきにふし沈ませ給ふ」（『小鏡』）。浮舟が死んだと聞かされた匂宮は、病床に臥す。4 「かたみとおほしめし、浮女のめしつかひ、侍従とい、し女を伴ひたまひし事を書たるにて候」（『龍野』）。「侍従といひし女房を、是を後に宮の御かたへよひ給ひて、御母中宮の御かたにさふらはせて、こよなく御かたみに御らんしけり」（『小鏡』）。侍従は浮舟に仕えた、匂宮びいきの女房。5 「かけろふといふは、君の行多なければ、手にとられすの心にて付し名と聞へまいらせ候」（『龍野』）。「此巻かけろふと云事は、此うき舟の、あとかたなくうせて後、かほるよみ給ひし也」（『小鏡』）。「手にとられず」は注6の和歌の第二句。

6 卷名歌。『小鏡』も『龍野』も同文。和歌の詠まれた状況は物語には、「あやしうつらかりける契りどもを、つくづくと思ひつづけながめたまふ夕暮、蜻蛉のものはかなげに飛びちがふ」（二七五頁）とあり、飛び交う蜻蛉（かげろう）に宇治の八の宮の姫君たち（大君、中の君、浮舟）を重ねている。7 「此かた、末かれのものを、おもに身木にする也」（『龍野』）。『源氏流極秘奥儀抄』の本文とは異なり、「この形式は末が枯れたものを、主に中心にするのである。」と訳せる。「末枯」は28野分の巻注8参照。浮舟の生命の終焉を表すか。8 「時節の諸花を、下に生る」（『龍野』）。『龍野』には「諸花」とあるが、草の巻は行の巻と同じで「時節/珍花」とある。「時節/珍花」は4夕顔の巻注

9、15蓬生の卷注8、22玉鬢の卷注6、51浮舟の卷注14に見られる。 9注1〜3参照。 10注11に掲載した『日本

書紀』によると、神武天皇が国見で巡幸したとき大和盆地の形を見て、交尾する蜻蛉の形のようにだと言った。その記述から「蜻蛉」と「大和」が結びつき、「大和」の名を持つ「大和撫子」へと連想された。大和撫子については26常

夏の卷注12参照。 11『日本書紀』卷三・神武記に、「国状を廻望みて曰く、「妍哉、国獲つること。妍哉、此には

鞅奈珥夜と云ふ。内木綿の真注国と雖も、猶し蜻蛉の臀帖せるが如もあるかも」とのたまふ。是に由りて、始めて

秋津洲の号有り」（二三五頁）とある。「臀帖」とは、交尾した蜻蛉の雌雄が互いに尾をふくみあつて輪の形となつて

飛ぶことで、その輪の形が円形の大和盆地に似ることにより、「蜻蛉」から「秋津洲」が大和地方、さらには日本国

の呼び名になった。 12「あきつ」はトンボの総称。「かげろふ」はトンボに似た別の昆虫も意味するが、ここでは

トンボ。 13『日本書紀』には蜻蛉の羽の形に似ているという記載はない。『和漢三才図絵』卷五十二・卵生類「蜻

蛉」には「日本紀ニ呼ニテ蜻蜒曰フ秋津蟲ト蓋シ吾國ノ地形蜻蜒展ヘタルカカヨリ故ニ神武帝始謂ニ我朝ニ為ニ秋津洲ト」とあ

り、日本列島はトンボの羽の形に似るから秋津洲と呼ぶと記されている。 14注10参照。 15「陽炎」は春の晴れた

日に、地上から立つ水蒸気によって光がゆらいで見えるもの。「かげろふ」には昆虫と自然現象の陽炎とがあるが、

どちらもおかないものに例えられるため、混同されて両者を区別できない場合もある。 16「荘子の理諺抄」とは、

儒学者の毛利貞斎が『荘子』を注釈して元禄十六年（一七〇三）に刊行した『荘子口義大成俚諺鈔』を指し、その卷

一に、「野馬」春日ニ當リテ。艸木発生セントスル時陽氣ニ催サレテ。蒸升ル底ヲ見レバ。郊野ノ間ニ放馬ノ馳回ル

ガ如クナルヲ。世俗ヨリ此レヲ野馬ト名ク。又陽燄（左注に「ヒノヒカリ」）ノ映フガ故カト思ヒテ陽燄トモ呼。又

ハ生絲ノ白キヲ攪乱シタルガ如ク。散々ニ見ルガ故ニ。遊絲トモ云。」とある。「遊糸」は春の野に立ちのぼる陽炎

であるが、「野馬」をカゲロフと訓ずる例は見当らない。 17秋という季節の設定は、注7の「末枯」にも合う。

18注11参照。 19「かげろふのあるかなきか」は、薫が「かげろふ」で終わる注6の和歌を詠じた後、「あるかなき

か」と独り言を言ったことによる。北村季吟『湖月抄』は典拠として、次の二首を引く。「たとへてもはかなきも

のはかげろふのあるかなきかの世にこそありけれ」、「あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかにけぬるよ  
なれば」。 20「吊」は41幻の巻注12参照。 21「くらんど少将」（蔵人『龍野』）。源氏物語において蔵人少将と呼ばれる

人は、葵の上の兄弟（1桐壺の巻）、軒端荻に通っている系図不明の人物（4夕顔の巻）、柏木の弟（39夕霧の巻・40  
御法の巻）、雲居雁の兄弟（41幻の巻）、夕霧の五男（44竹河の巻）であるが、52蜻蛉の巻には蔵人少将は登場しな  
い。

（釜丸祥）

五十三 手習テナラヒ

浮舟ウキフネ、小野コノのあまニに、つれられて、小野コノにすみけり。初瀬ハツセにて夢ユメの告ツケ有アリしに、廻メクりあひて庵イホに入イレをき、手習テナラヒなどをせ  
させしを、巻マキの名ナとしたる也。後ノチ、錚ヒコかね少将シヤウウケといふ人、浮舟ウキフネに戯カハレしを、ものうくおもひ、髪カミをけつりしこと、も  
有。

6 身をなけし泪ナミダの川カハの早ハヤき瀬セをしがらみかけてたれかと、めし  
7 又、むかしの春ハルのこひしくて、ねやの妻ツマナカ近カウき紅梅ハイに、

9 袖スリーブふれし人ヒト社ヤシみえね花ハナの香カのそれかとにほふはるの曙アケボノ

手習テナラヒ

御伝<sup>コテシイワク</sup>ニ曰<sup>イフク</sup>、此形<sup>コノカタ</sup>、時節<sup>トキセツ</sup>の花<sup>ハナ</sup>、幹<sup>ミキ</sup>にして大葉<sup>オホハヤリ</sup>也<sup>12</sup>。大葉<sup>オホハ</sup>のあしらへ大事<sup>タイシナリ</sup>也<sup>13</sup>。机<sup>ヅエ</sup>とみる也<sup>オミ</sup>。大葉<sup>オホハ</sup>もの一枝<sup>ヒトエダ</sup>、横<sup>ヨコ</sup>につかひ、もやう功者<sup>カウシヤアル</sup>有<sup>アル</sup>へし<sup>6</sup>。

愚按<sup>ウケ</sup>ニ曰<sup>イフク</sup>、「紅梅<sup>カウハイ</sup>の色<sup>イロ</sup>も香<sup>カ</sup>もかはらぬ」とあれば、紅梅<sup>カウハイ</sup>を活<sup>イッ</sup>るもよし。「扱<sup>アツ</sup>、大しやう、おもひかけぬゆかりに聞出<sup>キ、イッ</sup>し給<sup>タマ</sup>ひて」と云詞<sup>イフコト</sup>によりて、紫<sup>ムラサキ</sup>の色<sup>イロ</sup>の花<sup>ハナ</sup>いくるもよし。紫<sup>ムラサキ</sup>をゆかりの色<sup>イロ</sup>といふ也<sup>ナリ</sup>と心得<sup>ココロウ</sup>へし。

五十三 手習 まきはしらの君。時節<sup>トキセツ</sup>ノ花<sup>ハナ</sup>、大葉<sup>オホハ</sup>、紅椿<sup>ベニツバキ</sup>、紫色<sup>ムラサキ</sup>ノ花<sup>ハナ</sup>。

【訳】浮舟は小野の尼君に連れられて、小野に住んだ。(小野の尼君は)初瀬で夢のお告げがあったので、(浮舟と)めぐり会って(自分の)庵に住ませて、手習などをさせたのを、巻の名前としたのである。その後、(尼君の亡き娘の)婿であった少将という人が、浮舟に戯れたのを、(浮舟は)つらく思い、髪を削いで出家したことなどがある。

私が涙を流し身を投げた宇治川の早瀬に、誰がしがらみを設けて私を引き留めたのか。

また、昔の春を恋しく思い、寢室の軒先に近い紅梅に(ついでこのように詠んだ)、

袖が触れて(梅に香りを移した)人は見えないけれども、花の香りがその人のものかと(思わせるように)匂う

春の曙よ。

師伝によると、この形式は時節の花を中心にして大葉(を合わせるの)である。大葉のあしらいは大事である。(大葉を手習の)机に見立てるのである。大葉ものを一枝、横になるように活け、(机らしく見える)形にするには熟練の技が必要である。

愚案によると、「紅梅の色も香りも(昔と)変わらない」とあるので、紅梅を活けるのもよい。「さて、薫大将は思いがけない縁で(浮舟の生存を)聞きだしなさって」という一節によって、紫色の花を活けるのもよい。紫をゆか

りの色というのであると心得なさい。

【注】1 「此巻てならひと云事は、うき舟、小野のあまにつれられて、小野にすみけり」（『小鏡』）。「小野、尼と申人」（『龍野』）。「小野の尼」とは横川の僧都の妹であるが、源氏物語ではその呼称はなく「妹の尼君」などと呼ばれている。2 「小野、尼と申人、はつせにて夢のつけありしに、めぐりあひて、庵に入おき」（『龍野』）。この「初瀬」は大和国（奈良県）初瀬にある長谷寺を指し、本尊の十一面観音は靈驗あらたかな仏として信仰を集めていた。源氏物語には「古き願ありて、初瀬に詣でたりけり。」（二七六頁）とあり、その箇所は『湖月抄』は『細流抄』の1節、「源信僧都の母、長谷の観音の利生にて僧都を生したる事あり。されば初瀬にまうでけるよせある也。」を引用する。長谷寺に参詣すると子供を授かる、と信じられていた。3 源氏物語では、「おのが寺にて見し夢ありき。」（二八六頁）、「いみじくかなしと思ふ人のかはりに、仏の導きたまへると思ひきこゆるを。」（二八八頁）とあり、尼君は亡き娘の身代わりが得られるという霊夢を長谷寺で見た。4 「手習なとさせしを、巻の名といたしたるにて候」（『龍野』）。「手習」とは習字のことで、『源氏流極秘奥儀抄』や『龍野』の記述では、尼君が浮舟に手習をさせたことになる。しかし源氏物語では、浮舟が自発的にしている。『小鏡』にも、「た、つくく」と手ならひをして、すゝりにむかひて、おもふ事をも歌によみし也。」とあり、浮舟の思いが手習をして無意識に表れた。5 「此尼の娘、はかなくなりしち、聲の少将といふ人、浮ふねにたわむれ候ひしを、ものうくおもひ、かみをけづりたるとの事を、書し事にて候」（『龍野』）。尼君の亡き娘婿を『龍野』と『源氏流極秘奥儀抄』は少将とするが、物語では中将である。6 卷名歌。『小鏡』も『龍野』も同文。当歌は『小鏡』と『源氏流極秘奥儀抄』では浮舟が出家後に詠んだことになっているが、物語では出家前の詠作である。「しがらみ」は川に杭を打ち並べ、横に竹や柴などを結び付けて水の流

れを塞<sup>せ</sup>き止めるもので、ここでは入水した浮舟を助け出した人々を指す。 7 「春にも成ぬれば、いとと昔の春のこひしくて」(『小鏡』)。物語には、「春や昔のと、こと花よりもこれに心寄せのあるは」(三五六頁)とあり、浮舟は紅梅を眺めて、色も香りも昔と同じであることに気づき、恋に溺れた過去を思い出した。 8 「ねやのつま近き紅梅の」(『小鏡』)。逢瀬の場所である「寝<sup>ね</sup>屋」は、浮舟が恋の記憶の糸を手繰るための機能を果たす。 9 『小鏡』にも同文の和歌を掲載。「色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれしやどの梅ぞも」(古今和歌集・春上・三三・詠み人知らず)のように、梅の香りは人が移した移り香とする。紅梅は紫の上から匂宮に託されたので(40御法の巻注13)、匂宮を連想させ、浮舟が思い浮かべているのも匂宮か。 10 「此かた、時節の花」(『龍野』)。 11 「身木にして、大葉也」(『龍野』)。大葉については19薄雲の巻注11、21少女の巻注89、24胡蝶の巻注8、27篝火の巻注8を参照。大葉はおおぶりの葉であるため、衣装の袖や波などに見立てるが、ここでは注13のように使う。 12 「大葉の応答、大事也」(『龍野』)。「あしらへ」は「あしらひ」(31真木柱の巻注7参照)と同じ意味。 13 「机と見る也」(『龍野』)。大葉を、手習をする文机になぞらえる。 14 「一葉、横へ遣ひ」(『龍野』)。大きな葉を横に流すように使い、机を演出する。 15 「もやう」は18松風の巻注12参照。「其外はもやうは工者あるべし」(『龍野』)の本文では『源氏流極秘奥儀抄』と解釈が異なり、大葉以外の活け方で趣を作るには熟達した技が必要である、となる。 16 「紅梅の、色もかも、かはらぬも」(『小鏡』)。注8参照。 17 「扱、大しやう、おもひかけぬゆかりに聞<sup>き</sup>出し給ひて、たつね給ふ」(『小鏡』)。物語では当巻において、浮舟を出家させた横川の僧都が明石の中宮に浮舟について話し、中宮に仕えていた小宰相が薫に伝える。薫はそれを聞いて驚き、浮舟に会いに行くことを決意する。 18 物語で語られる「紫のゆかり」(6末摘花の巻、二八九頁。34若菜上の巻、六三頁)とは、藤壺の姪である紫の上を示し、その言葉か

ら「ゆかり」は紫色と理解されている。 19 真木柱は、鬚黒の大將と北の方との間の長女で、蛭宮と結婚する。浮舟の実父は蛭宮の弟であるので、真木柱にとって浮舟は義理の姪にあたる。また真木柱の娘の宮の御方にも、匂宮は言い寄ったことがある。そのため、真木柱と浮舟・匂宮は全く無関係ではないが、真木柱は44竹河の巻を最後に物語の舞台から立ち去っている。 20 『源氏流極秘奥儀抄』の53手習の巻に「紅椿」という言葉はなく、「紅梅」の誤写か。

（酒瀬川なおみ）

五十四 夢浮橋

手習の君、小野に居玉ふを薫聞伝、ひたちの守か子を使として御文遣し玉ふ。歌に、

法の師と尋る道をしるべにておもはぬ山にふみ迷ふかな

4 さて夢の浮橋とは源氏の君栄花なりしも、たゞ夢の如くにして、雲かくれ給ふと無常を觀じ、箒木より始て夢の浮橋にとまる事、「諸行無常は天に登る橋、是生滅法はいよいよの川を渡る舟」と狂言綺語の物語も皆成仏のきづな也。

夢浮橋

御伝曰、此形、残花を旨として、前に珍花を活る也。さて源氏一部の意は勸善懲惡、又、幻の世のはかなき世を觀し、8、木のあるかなさかに始り夢の浮橋に終る。人間世界のはかなき事を書きつらねたる也と心得へし。

愚按曰、源氏の栄花も夢の如く善智識にして雲かくれ給ふ。しんら万象のことも、果は無常をしらせん為也。

抑 活華の実は栄花を見て、終に枯ゆく無常を悟る事、唯一瓶の中にあり。是、源氏活花の奥儀也。扱 涅槃經の四句偈を以、花意を知ることあり。活花に於て諸行無常とは、活たる花も見る人も皆諸行無常也といふ意を

悟るべし。是生滅法は愛欲の川を渡ると、実に何れも花を見て愛欲を離る、也。生滅々已といへるは今活たる花、已に無常を示す也。「あすありとおもふ心のあだ核」と歌にいへるも是也。寂滅為樂といふは、花を見て成仏することを悟る也。願念の窓の中、三明の塵を払ひ、座禪の床の上に無色相を悟る。活華は心直にして情ふかく仏の慈悲心を以、主と成、客となる。其清浄薫香、極楽浄土の意にかなふならし。

【訳】浮舟が小野におられるのを薫は人づてに聞き、常陸守の子を使者としてお手紙をおやりになる。和歌に、  
(僧都を) 仏道の師として訪ねる道であったが、その道を道しるべにして、思いがけない(恋の) 山に踏み迷うことだなあ。

さて夢浮橋とは、光源氏が栄華を極められたのも、ただ夢のようにして、お亡くなりになる、と無常を悟って、帚木の巻から始めて夢浮橋の巻で終わることは、「諸行無常(を悟ること)は極楽に渡る橋、是生滅法は川のように深い愛欲を(離れて極楽に) 渡る舟」と(教えているこの) 狂言綺語の物語もすべて成仏とのつながり(があるの) である。

師伝によると、この形式は散り残っている花を主として、前に珍しい花を活けるのである。さて『源氏物語』全帖の主旨は、善行を賞し勧め悪行を戒め懲らすこと、また幻のようなこの世をむなしい世と悟り、(近づくと見えなくなる) 帚木の(ように) あるかないかで始まり、夢の中の通い路で終わる。人間世界のむなしいことを書き連ねたのであると心得なさい。

愚案によると、光源氏の栄華も夢のようで、(世人を) 仏道に導く人としてお亡くなりになる。(源氏物語に書かれた) 森羅万象の事柄も、結局は無常を知らせるためである。そもそも活け花の実体は満開の花を見て、ついには枯



れてゆく（という）無常を悟る事が、ただ一瓶の中にある（のである）。これが源氏流活け花の極意である。さて、涅槃經の四句の偈けによって、活け花の主旨を知ることがある。活け花において諸行無常とは、活けている花も（それを）見る人も、すべて諸行無常であるという趣を悟らねばならない。是生滅法は愛欲の川を渡る（舟の）ことで、ほんとうに誰もが花を見て愛欲から離れるのである。生滅滅已といつているのは、今活けている花が、すでに無常を示すのである。「明日があると思う心のはかなく散る桜」と歌に詠んでいるのもこれ（のこと）である。寂滅為樂というのは、花を見て成仏することを悟るのである。希こいねがう窓の中で、三明を曇らす塵を払い、座禪をする床の上で無色相を悟る。活け花は心がすなおで情けが深く、仏の慈悲の心によって、主となり、従となる。その清らかな芳香は、極楽浄土の趣にかなうであろう。

【注】 1 「手習の君、小野に居給ふを、かほる、聞つたへ、ひたちの守か子（常態）をつかひとして、御文つかはしたまふ」（『龍野』）。「大将しやうき、いたし給ひて、此手ならひの君のおと（弟）、ひたちのかみか子こを、むかしのなくさめにめし出して、つかはせ給ふを御つかひにて、御文をつかはさる、」（『小鏡』）。「手習の君」は浮舟を指すが、その呼称は物語本文にはない。「手習テナラヒ」は53手習の巻注4参照。「ひたちの守か子かみか子」は常陸守と浮舟の母である中将の君との間の子であり、浮舟の異父弟にあたり、小君と呼ばれ薫に仕えている。 2 「歌に」（『龍野』）。 3 巻名歌で『龍野』と同文。『小鏡』は結句が「ふみまとふかな」。「法の師し」は浮舟の生存を薫に伝えた、横川の僧都を指す。 4 「此巻ゆめのうきはしと云事、源氏わか身けんしいにしへの栄花えいけはをはしめ、御身のさえもよ（才）にこえ、品しなたかくむまれ給ひて、御かたちは、ひかるとさへいはれ給ひて、御心にいみしくおはせし事も、た、夢ゆめのことくにて、た、一ふしの御なけきを善智識ぜんちしきにして、雲くもかくれ給ふ。又か様に、こと葉はおほくつくりいたせは、物かたりも、はてはみな無常むじやうをしらせんためなれ

は、夢ゆめのうきはしとはいふなり」(『小鏡』)。室町時代になると第一帖(桐壺の卷)は序論にあたり、第二帖(帚木の卷)から物語は始まる、と考えられるようになる。『源氏流極秘奥儀抄』も2帚木の冒頭に、「帚木とは此源氏一部の惣計ソウケイ、非有非空ヒウヒクウのことを書カキて、夢ユメの浮橋ウキハシにて終る作者オウシャの趣意也シユイナリ」とある。5「諸行無常シヨキヤウは天てんに上る橋はし、是生滅セシヤウ法ほうは、あひよくの川を渡る舟ふね」(『小鏡』)。「是生滅法」は、万物はすべて変転し生滅し不変のものはないという意味。「愛欲の川を渡る」は煩惱を断つこと。似た表現は藤原道長の葬送で比叡山の座主が語るなかに見られる。「諸行無常は天上に上る智慧の橋なり、是生滅法は愛欲の河を渡る般若の船なり、生滅滅已は剣の山を越ゆる宝車なり、寂滅為樂は浄土に参る八相成道の義果なり」(『栄花物語』卷第三十、一六九頁)。6「かゝる狂言綺語キヤウケンキゴの物語にたつさは(真実)るとも、しんしつ(真実)のふかき心をよくしりなは、なとかはさと(指り)りをえさらん」(『小鏡』)。「狂言綺語」とは道理に合わない言葉と巧みに飾った言葉のことで、とくに仏教の立場から物語の類をいやしめていう。それに対して、物語は仏教の教えに反しないという見方が生まれ、たとえば源氏物語は光源氏の栄光と出家を描くことにより、読者に無常を教えるという考え方が鎌倉時代になると広まる。7「此かた、残花をおもにして、前に珍花を生る也」(『龍野』)。「残花」は諸行無常を表現するために用いる。「珍花」は4夕顔の卷注9、11花散里の卷注13、15蓬生の卷注8、22玉鬘の卷注6参照。8「帚木」も「夢の浮橋」も源氏物語の卷名であるとともに歌ことば。「帚木」は『歌ことば歌枕大辞典』によると、「信濃国の園原にあった木のこと、遠くからは見ることができが、近づくとも見えなくなる」という伝承を有する不思議な木」のことで、「存在はわかつていながらなかなかあつてくれない女のあり方」に例える。2帚木の卷注5参照。「夢の浮橋」は夢で恋人を慕って通る橋。「夢」も「浮き」も儚いイメージがあり、「浮橋」は「憂き端」(つらい話の一端)を暗示させる。よって「帚木」も「夢の浮橋」も「人間世界のはかなき事コト」の象徴

である。9 善知識は人を仏道に導く高僧で、ここでは光源氏を指す。森羅万象は宇宙に限りなく存在するすべての

物事。10 偈は仏の徳や教えを賛美する詩のことで、涅槃經の四句の偈は「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」。11 注5に引用した『小鏡』本文を参照。以下、注13まで涅槃經の四句の偈を活け花に当てはめる。12

「生滅々已は鈿の山を越る車」（『小鏡』）。生滅滅已は生滅の世界から超脱して涅槃に入ること。「あすありとおもふ心のあだ桜」は、享和元年（一八〇一）刊『親鸞聖人絵詞伝 一』に見られる和歌の上の句で、下の句は「夜は風の吹ぬものかは」。

『故事俗信ことわざ大辞典』（小学館、一九八二年）は、「明日があると思っていると、桜の花がはかなく散るように、機会を失うことになる。世の無常なことをいう」と解釈する。13 「寂滅為樂は、成仏の間也と覺る」（『小鏡』）。寂滅為樂は煩惱を捨て涅槃の境地に入って真の安樂を得ること。14 「願念の窓の中には、心を三明の月にかけて、座禪の床の上には眉に八字の霜をたれさらん、とおもひて、はやく世をいとひ給ふへし」（『小鏡』）。

「三明」は過去・現在・未来に通じている知恵、「無色相」は形がないこと。15 「心を直にして情ふかければ、慈悲誠にして」（『小鏡』）。

「付記」草の巻は最後の見開きの右の丁に53手習の巻、左の丁に書写者の署名「源氏会頭 虚心斎松泉」と落款があるので、当初から夢浮橋の巻はなかったと推定される。

（真弓大芽）